

解答

一

問一 a ア b イ 問二 エ

問三 乗り物酔いをさけるためなら、一年間小遣いをあきらめてもよい

問四 うれしいけれどもやめてほしいと照れくさく思っている。

問五 一つ目 昔の旅を思い出し、窓の開く夜行列車でしか味わえないものに触れるのもよいと思ったから。

二つ目 窓の開く列車で帰省したいという次女の切実な願いをかなえてやろうと思ったから。

二

問一 a 唱 b 周 c 費 d 和 e 願

問二 自分以外の人の気持ちを考えることができなくなっていること。

問三 ウ

問四 相手のことを思いやり、相手の言葉だけでなく、相手の表情や態度を見て相手の本当の気持ちを察知しようとする。

問五 若者は、他人の立場や気持ちを想像できなくなっているのではないが、身近な人たちの気持ちを想像することに過剰に気を配り過ぎる結果、直接関係ない人の気持ちまで想像する余力が残っていない、と考えている。

三

問一 高齢のミチさんに、進行したがんの手術をすること〔について。〕

問二 元気いっぱい、手術を受けようとする(病氣と闘おうとする)様子

問三 I 猫の手も借りたい

II ① うま ② きつね ③ つる ④ ねずみ ⑤ へび

問四 ウ

問五 死は悲しいものだが、ともに耕した土地を子供達に引き継ぎ、家族に囲まれて死ぬことで、人間が死ぬという現実と命のあり方を子供達に伝え、死を自然に受け入れていること。

四

① 訪問 ② 賃金 ③ 至急 ④ 観衆 ⑤ 孝行

⑥ 発揮 ⑦ 操縦 ⑧ 針小棒大 ⑨ 専 ⑩ 除

解説

一

問二 梅干のおまじないに頼ったり、座席を占領して横にならないといけなくらい具合が悪かったり、次女の乗り物酔いは、かなりひどかったようです。「こんなことを何度も繰り返しているうちに」とあるので、ひどい乗り物酔いを治すために、さまざまな工夫をし続けたのでしょう。それでもなかなか良くならない。おそらくともに旅をする家族にも迷惑がかかりますし、自分のそんな体質が自分で情けなくてつらかったのだと読み取れます。

問三 どの程度次女の悩みが深刻なのか、彼女の言葉から読み取ります。乗り物酔いをしなくてすむ普通列車の旅をするために余分にかかるお金を、自分のお小遣いでまかないたい、と言っているのです。お小遣いを、「そっくり一年間諦めてしまうというのは、子供にとっては容易ならぬことではないだろうか」と筆者は述べ、その思いつめ方に胸打たれています。

問四 母を駅のホームに見送りにきた5, 6人の子供たちが、全員で「蛍の光」を歌い出したのです。発車のベルが鳴ると歌い出した、ということは、あらかじめ兄弟姉妹で打ち合わせしてあったのでしょう。母を思っただけの子供たちの大合唱は、思いがけなく、うれしいけれども、場所柄を考えると気恥ずかしく、そのようなけなげさにどう応えていいかわからない照れもあり、母はあわてて「ぶつまねをして」子供たちをやめさせようとしています。この後、発車してからの母のすすり泣きに、子供たちの歌に感極まったことや、子供たちと別れるつらさなど、母の複雑な心情も描かれています。

問五 一つは、文章の初めから話題になっている次女の願いをかなえてやりたい、という気持ちです

から、容易に書けるでしょう。「窓の開く」はもちろん、次女の乗り物酔いをさけるためですね。

もう一つは、筆者が自分自身の「汽車の旅」の思い出に耽っているところから読み取ります。学生時代以降、何度か筆者は普通列車の旅をしています。窓から流れ込む春の微風を思い返すところ、また、先ほどの「母の見送り」を目の当たりにした記憶。いずれも、「窓の開く普通列車」だからこそ味わえるものであるという思いがあります。だから、またそのような旅を試みるのも良いと思うのです。

二

問二 傍線Ⅰの前と後、両方から考えます。これより前は、「末期ガンで余命半年の人の気持ちなど、自分にはわからない」と言う最近の大学生の反応への困惑が書かれており、傍線の後は、(他にも自分のように感じている人たちがいるため、)病に冒された人たちの立場が想像できるような工夫がいろいろなところで凝らされている、と述べられています。つまり、最近の学生は「他者の気持ちや立場を思う想像力が欠けている」と筆者が感じているとまとめられます。

問三 ランディー・パウシュ教授の最後の講義の模様を見せることで、学生たちに想像させたかったことは何か、という問題です。実際には「教授はエリートだから」と、ギャップを感じた学生たちにはピンと来なかったようですが、病に冒され死が目前に迫りながらも、学生たちに向かって講義を行うパウシュ教授の壮絶な思いのたけが、そのネットの講義から推し量られるのではないのでしょうか。

問四 占い師のサイトで語られているコラムの要点が、「対人関係の基本」と言えることです。コラムの中の具体例は用いず、言いたいことを拾い上げます。「空気を読む」＝「人の気持ちを察知して思いやる」ということ、そして、どのように察知するかというと、「相手の表情や態度を見て、相手の本当の気持ちを」つかむということ、字数内におさまるようにまとめます。

問五 若者の心情に対する筆者の考察は、主に最後の二段落に書かれています。若者たちは「ごく身近な人たちの気持ちを深読みし～それだけで心のエネルギーを使い切り」「直接関係ない人」の気持ちを「想像する余力は残っていない」と書かれています。自分の世界の対人関係に心をくたくあまり、その世界にいない人たちの気持ちに思いをはせる余裕はない、ということなのでしょう。だから、冒頭にあるように、自分と無関係の「ガン患者」の気持ちは「わからない」となるわけです。波線部に「対して」と聞いているので、波線部を受けた書き方をする（「全く人の気持ちを想像できない」というのは違う、ということ述べる）よう気をつけましょう。

三

問一 「ぼくがミチさんと同じ立場に立たされたなら、手術はしてほしくないな」といったアドバイスしていることから判断します。高齢なのに手術していいものか、と「困った」のです。

問二 「やる気満々」で「元気いっぱい」で、手術するのがあたりまえだと思っている様子ですね。しっかりと「生きること」を選択しています。

問四 徐々にミチさんとの別れへの「覚悟」を固めつつ、ミチさんとの最後の日々を「本当に貴い一日一日になってきた」と、家族は大切に過ごそうとしています。

問五 傍線の直後から、文章の最後までで、タオスの老人の死の迎え方と、ミチさんの亡くなり方について、筆者の心を打った点を交互に語っています。その中から、二人の共通点を探していきます。タオスの老人の詩の内容そのものにも注意して読みます。

もっとも重要なことは、傍線二行後の「命のあり方を子供たちに伝え～バトンタッチをしていく」ということでしょう。子供や孫に囲まれ、自分の生の軌跡に満足し、そしてそれを引き継ぐ命に伝えていく。「思い残すことなく」素晴らしい人生だったと感じながらあの世に旅立terということは、つまりは「死をすんなりと受け入れることができる」ということに他なりません。だから「今日は死ぬのにとってもよい日だ」と心からうたえるのです。二人のこのような生のしめくくりかたを、まとめて表してみましよう。